

二十歳の助走⑥



世界を舞台に

活躍する人たちは、

「若き日」に何を学び、

何に挑戦したのか。



作家
楊逸

考える暇も、寝る暇もなく、 とにかく夢中で生きた！

——楊さんは一九八七年に来日しますが、その前は中国でどのような生活を送っていたのですか。

楊 大学で経理を勉強していました。デパートに就職しようと思っ

た。当時の中国は改革開放路線が始まったばかりで、これから経済が発展するのではという雰囲気がありました。中国では親が勤め先を辞めた後に、そのまま子どもが就職するということがよくありました。しかしそれが許されない職業があつて、それが医者と教師です。私の父は、残念ながらその教師でしたから（笑）、私は自力で職を探さない

いけなかったのです。大学に入る倍率は一〇倍くらいでしたが、中国は社会的にも男女平等が貫徹されているので、大学で勉強する女性は多かったです。

——ということは、大学時代は勉強漬けでしたか？

楊 うーん……。あんまり勉強はしなかったかな。両親共に厳しくて、家ではなんとなく窮屈に感じていましたから、知人の機械関係の店でアルバイトしたり、友人と遊んだり。高校卒業後すぐに人気のデパートに就職した仲良しの同級生がいました。彼女は病弱のわりに社交的で派手好きで、いつも最先端のオシャレを私たちに見せてくれました。

しかもどこから仕入れたのか、道端で爆竹を売っては小遣いをつくるような商売上手。

そんな彼女がデパートに初めてできた化粧品専門コーナーに配属されたんです。当時は親もクリームしかつけないような時代に、初めてファンデーションが売られて、それはもう感激しました。みんな朝から並んで買いに行ったものです。そして、それが彼女の商魂に火をつけました。店員であることを利用してファンデーションを裏で仕入れて、「一緒に売ろう」って。もちろん、やりましたよ。二人で市場に行きました。でも、私がやると全然売れないんです。三日間やって一個も売れなかった。あのとき、私は商人には向いてないと思いました。

自分の力で生きる自由を求め、日本へ

——とても楽しそうですね。当時の中国の生活はどうでしたか。

楊 当時は日本製品なんでもちろんありません。ラジオで流れる外国音楽といえば、クラシックばかり。ビートルズなどの洋楽は、日本に来てから知りました。私の小さいときは、香港や台湾のものでもこっそりとしか聞かせませんでした。いまとなつては、いったい何を楽しみに生活してい

たのか思い出せないくらいです。いまの中国では、多少高くても日本で買えるものならたいがいは手に入ります。すっかり変わりましたね。

——その後、日本に住む親戚を頼って来日されます。日本の印象はいかがでしたか。

楊 先に親戚が何人か留学していたのを見て、いてもたってもいられなくなりました。日本語なんて少しもわかりませんでした。中国当局の許可をもらってすぐに来日しました。日本語を勉強したのは、それからです。一九八〇年代の日本と中国は、天と地ほどの差でした。新しい生活に不安を感じるよりも、親元から離れた解放感のほうが大きかったですね。

来日当初は従兄が通っていた東海大学近くの学生ばかりが暮らすアパートで生活をしました。家賃が月一〜二万円、風呂なし共同トイレです。大家さんが経営するプラスチック工場で夜勤のアルバイトをしながら、新宿にある日本語学校に通うようになります。徹夜で働いて工場の臭いが体にも頭にも染み付いたまま、満員電車に乗りました。通勤ラッシュを逆手にとつて、隣の人に寄りかかって寝ちゃうから、周りの人にはさぞ迷惑だったと思います。

——ものすごい忙しさです。

楊 日本ではすべて自分でやらなければならなかったの

で、寝る暇も考える暇もなくて、その頃の記憶はあまり残っていません。でも、それくらいだったから、逆に不安も感じる暇もなくて、よかったのかもしれない。中途半端だったら、心配で眠れなかったかもしれないし。

——それからお茶の水女子大学へ通われますが、そこでのキャンパスライフはいかがでしたか？

楊 やっぱり女子大は静かで、みんな頭がよくて黙々と勉強していて。私はどちらかというと男っぽかったし、あまり合わなかったですね。

アルバイトばかりでしたが、それでも時間を見つけて遊びました。来日当時、日本はバブル景気で、大学生はみんな車を持っていました。同じアパートに住む従兄もぼろぼろの中古車を買ったので、よくドライブに連れていってもらいました。白い車なのに片方のドアだけ緑で、すごくおかしかったけど、夜勤明けで疲れていても、喜んで行きました。おかげで東海大学周辺のドライブコースは熟知しています。なんであんなに元気があったんだろ。今ではあんなパワーもないし、あんな車に乗る勇氣もありません（笑）。

日本の家は天井が低い！

——日本で戸惑ったことはありましたか？

楊 細かいことではたくさんありますが、いまだにできないのは、正座です。それと、畳の暮らしはできないですね。一度畳の上に布団を敷いて寝ていたら、夜中にすごーく大きなゴキブリが顔に乗ってきたことがあります。あれには参りました。ハルビンではそんな大きいものを見たことなかったです。あれ以来、畳に布団では寝られなくなりました。

そうそう、日本の住居に関してもう一つ気になることがあります。天井。日本の家は、天井が低いですね。初めは気がつきませんでした。私は、現在の家に移る前は、それこそよく引っ越しをしました。でもそのたびに、何か違和感があったんです。そして一〇年前にいまの家を見つけたとき、あつと思えました。天井が高い。なんか懐かしい開放感。中国の家は、狭くても天井が高いんです。それを思い出しました。

——異文化のなかで感じる戸惑いを、持ち前のバイタリティとユーモアで乗り越えられてきたことが、よくわかります。大学卒業後はどのような進路に進まれたのですか。

楊 在学中から現代詩を投稿していた在日中国人向けの中国語新聞の記者になり、楽しくやっていました。ただ離婚

を考えたときに、大学在学中から続けていた収入のいい中国語教師に集中することにしたのです。それからいろいろあつて今日に至っています。

——常に「言葉」を意識するような環境にいらしたのですね。幼い頃から文章が好きだったのですか。

楊 小さい頃からかはわからないですが、書くことは好きでした。あつという間に書けるような、短いものが好きです。小説を書くようになって、いちいち前の内容を思い出さなければいけなくて、苦労します。また、いろいろなアルバイトを通していろんな人を見ました。やっぱり多くの人を見る機会がないと書けないかもしれないですね。

生きるために、前に進む

——最後に若い人へのエールをお願いします。

楊 日本の若い人は、あまりにも行儀がよく、静かで、ちよつと活気がないですね。もし人生のなかで無茶をするならば、本当に若い二〇歳代だと思います。そういうときに無茶をしないのは、すごくもったいないと思います。もちろん成人式で暴れるというようなことではなく、もつと

冒険のような人生を。

——楊さんは冒険してきましたね。

楊 私の場合、生きていくのに必死だったというのが正直なところですよ。瀬戸際に追い込まれるのはつらくはありますが、私には意外と合っているかもね。もちろん不安だらけですが、進まないで死んでしまうから、生きるためという感じですよ。そういう切実さは、日本の学生には実感しづらいと思います。

それは子どもだけの責任ではなくて、親も子どもには苦勞させたくないという気持ちが強いうような。でもそれは間違っているような気がします。不自由なく暮らすことは、実は一番つまらないことかもしれないですよ。私みたいのがいいってわけではありませんけど。

そう笑う楊さんのご子息もちょうど二〇歳。「ダメよー、蹴飛ばしたいよ、甘えさせてなんかかないよ。うーん、そんなこともないかな」と、厳しくも温かい母の言葉で締めくくられた。 ■

やん いー

一九六四年、中国ハルビン生まれ。八七年来日。九五年お茶の水女子大学卒業。二〇〇七年「ワンちゃん」で文藝界新人賞受賞。〇八年「時が滲む朝」で芥川賞受賞。日本語を母語としない作家として史上初めて受賞となる。作品に「金魚生活」など。